

論文の内容の要旨

論文題目 思考の分水嶺—パーヴェル・フロレンスキイの思想に見る「形」をめぐる論理

氏名 細川 瑠璃

本研究は、ものの形とは何かという大きな問いに対し、20世紀初頭のロシアで活躍した思想家パーヴェル・フロレンスキイ（1882-1937）の著作を読み解くことで一つの回答を提示することを目的としている。

人間の営為であろうと自然に関することであろうと、我々の生の周りには常に形がある。しかし、形というものそれ自体が関心の中心となり、形とは何かということが正面から問われることは少ない。形への問いは、認識論的に解決することがあるいは可能であるかもしれないが、人間が古来、形というものに呪術的な力を認め、認識の外にある何らかの実在であるかのように捉えてきたこともまた事実である。形とは何かという問いへ向かうに際し、本研究がフロレンスキイの思想を取り上げる理由は三つある。

モスクワ大学で数学を学び、かつ司祭でもあったフロレンスキイは、20世紀ロシアを代表する思想家の一人であり、その洞察が及んだ領域の広さと深さから、20世紀ロシアにおける最大の知性の一人であると言っても過言ではない。そのような人物が形という謎にどのように迫ったのかを考察することは、ロシア思想の枠を越えて、広く形とは何かということを考える上で有意義であろうと推測される。

第二に、形という切り口からフロレンスキイの思想全体を見渡すことは、フロレンスキイの思想そのものへの理解を深める上でも非常に有効である。フロレンスキイは数学や神

学、芸術、言語、歴史等、非常に多岐にわたる分野において論考を残したが、このためにフロレンスキイを研究する者にとっても研究の切り口があまりにも多くあり、どんなテーマであれ何かしらフロレンスキイと絡めて論じることができる状況にある。殆ど任意の切り口、角度から見る事が可能なフロレンスキイの思想であるからこそ、それが持つ射程を見失わないようにする必要がある、本研究は、1900年代初頭の数学に関する論文から1920年代半ばの芸術論や言語論に至るまで、フロレンスキイが常に言及してきた形 формаに着目することによって、先行研究の問題点を克服することを企図している。

第三に、形をめぐるフロレンスキイの思考には、20世紀初頭、またそれ以前の、ロシアのみならず西欧から東方キリスト教の故地に至るまでの、様々な思想や知が流れ込んでいく。フロレンスキイの思考を追うことで、我々はその副産物として、20世紀初頭のロシアにおいて多様な知や文化の水脈がどのように合流し、対立と融合を生んだかということを生きた実例の中に見ることができる。

フロレンスキイの形をめぐる思考は、形をめぐる記述されながら、それ自体もまた閉じた一つの形をなすという構造を持っている。したがって本研究は、フロレンスキイが形をめぐる生み出した形を追いつつながら、フロレンスキイの思想においてそのような形が成立し得る理由や意味、形を取り巻く独特な論理を明らかにしていくという構造をとる。まず第1部第1章においては、フロレンスキイが自身の思想を通じてその実現を目指した「具体的形而上学」を取り上げ、その全体像の把握を試み、フロレンスキイの思想において「ルネサンス」的世界観に対して「中世」的世界観の復権が主張されていることを確認する。フロレンスキイは「ルネサンス」を、合理主義を旨とする、普遍と体系へ向かう世界観とし、そこでは「形」は否定され、個の個別性が捨象されると考える。それに対し、個を個として捉えることができる、「形」に基づく世界観が「中世」的世界観である。西欧近代の殆どの学問は「ルネサンス」のもとで発展してきたが、そこでは個を個のままに捉えることができない。学でありながらも、個に光を当てることができるような学を打ち立てなければならないという考えが、フロレンスキイの「具体的形而上学」に結実している。このようにして考え出された「具体的形而上学」は、体系的ではなく、主要なテーゼをも持たない。その代わりに、そこでは「花序」であることが目指されている。フロレンスキイは、「具体的形而上学」の対象が個別具体的で花序的統一のもとに在ることを言いながら、同時に、それら対象の記述の在り方の花序性を求める。ここでフロレンスキイの思考において、記述の在り方が、その対象の在り方の担保となっていることが示唆される。続く第2章では、個というものを思考する際に、フロレンスキイが師であった数学者ブガーエフの不連続関数への見方とモノドロギーへの傾倒を受け継ぎながら、しかし個を顔のない単位的な個へと還元しないことに

注意を向けていたことを指摘する。この点においてフロレンスキイは、一つ一つの数に固有の内的な性質と、それらの外的なあらわれがあることに注目し、このことによって、モナドの代わりに数を個別具体的な存在の基本とする。

第2部第1章では、前章の最後で、フロレンスキイが数の内的性質とその外的あらわれとをその個別具体性の根拠としたことを受けて、フロレンスキイの思想においては、数に限らず、内的性質と外的あらわれによって浮かび上がる「形」という概念こそが、個が個であることの必要十分な条件と見做されていることを明らかにし、フロレンスキイの思想における「形」の意味を探る。「形」について思考する際にフロレンスキイの念頭にあるのは、不連続関数である。フロレンスキイの考えにおいて、不連続関数は自らの変化の領域を予め持っているという点で、周囲との間に境界を持ち、閉じた一個の全体として捉えられる。さらに、それは関数であるがゆえに、変数同士の対応関係という内的性質ないし秩序を持ち、その性質は演算を通じて外的あらわれに展かれる。部分的な変化に先立って自身の変化の全領域を持つ不連続関数は実無限に、変化の全体像を持たない連続関数は潜在無限になぞらえられ、ここでフロレンスキイの「形」の意味が明らかとなる。それは、あるものが閉じた領域を持ち、一個の全体として捉えられるとき、そして、内が外に十全にあらわれるとき、その自己完結的な充溢と閉鎖性ゆえにそれが一個の存在として立ち上がってくるが、その立ち上がってくる存在の内と外のなす稜線、分水嶺が「形」であるということ、そしてそのような「形」の中で最上のものが実無限であるということである。第2章では、フロレンスキイがこのような「形」という考えに至った背景を、東方キリスト教に由来する宗教的背景と、一見すると「ルネサンス」に含まれるような西欧の人文知からの影響という二つの側面から検討する。第3章では、このような「形」という概念がフロレンスキイのあらゆる議論に見られることを明らかにする。有機体や身体、名、本などは、第1章で示した意味で「形」的であり、まさに「形」的であることによって、それらはフロレンスキイの思想において存在として捉えられている。しかし、単に存在と言っても様々なレベル、強度がある。第4章では、「形」なすものが、実体としての強度を伴って存在するとフロレンスキイが考えていることを明らかにするとともに、フロレンスキイにおいては、記述とその対象に関しても、両者が一致し重なり合うとき、両者が一体となって、それ自体が実体的に存在すると考えられていることを指摘する。ここには、ポアンカレやマッハによる非ユークリッド幾何学をめぐる議論、またポアンカレの規約主義、デュエムらによる科学と記述をめぐる議論からの影響が見られる。フロレンスキイはこれらを参照しながら、内的一貫性を持つ幾何学によって記述される空間は、それ自体現に在ることと同じであると考え、この考えをあらゆる記述とその対象に適用する。したがって、たとえばフロレンスキイにおいて、ダンテの『神曲』は、

それ自体固有の幾何学的一貫性に基づいて記述された空間である以上、「現実」であるのと同じことである。翻って、ここにおいて、第1部第1章で扱った「具体的形而上学」の意義が明らかとなる。第1部第1章では、記述の方法がその対象の在り方の担保となることが示唆された。それはその記述の一貫性が、その対象そのもののあらわれとなり、両者が一致して現出するがゆえであるが、そのような記述と対象とによって一個の「形」として現出する「具体的形而上学」は、まさにそれ自身の存在によって、「ルネサンス」的世界観の支配からの離脱、一つの反証を提示していることになる。

第3部では、第2部で一旦その自己閉鎖性・自己完結性のもとで閉じたフロレンスキイの思想における「形」が、コスモロジーへと展かれていく過程を追う。第1章ではイコン論、第2章ではダンテ、ポアンカレ、アインシュタインらの議論に基づいて繰り上げられる宇宙論を取り上げ、これらのコスモロジーが「形」をめぐるフロレンスキイの論理と繋がることで、それ自体が一つの「形」として現出してくること、ここにこの宇宙論の存在論的意義があることを示す。

本研究を通じて明らかとなるのは、フロレンスキイの洞察において、形が、個を個として、存在を存在として浮かび上がらせる基本原理とされていること、その存在の、互いが互いのあらわれであるような内と外とがなす稜線、分水嶺であると捉えられていることである。このことは形とは何かという古くからの問いに一つの光を投げかけるものであるとともに、フロレンスキイが「形」を、壊したり分解したりすることなく、そのまま掬い取るべきだと訴えたことは、現代においても一考する価値のあることであろう。